アリタノヒビキ

二〇一二年三月

0号

〈特集〉

2つの有田のルーツ

「唐船城、八百年。」

「有田焼、四百年。」

一般社団法人有田観光協会 フリーペーパー

〈アリタ ノ ヒビキ〉0号（創刊準備号）

取材協力　藤巻製陶／TEL.0955-42-3012
乃利陶窯／TEL.0955-43-2890　http://noritoukama.sagafan.jp/
俊右衛門窯／TEL.0955-43-3727　http://www.shun-emon.com/

アクセス　唐船城／松浦鉄道大木駅より徒歩10分
泉山磁石場／JR上有田駅より徒歩10分

発行元　一般社団法人 有田観光協会
住所／佐賀県西松浦郡有田町岩谷川内 2-8-1
TEL.0955-43-2121 FAX.0955-43-2100　http://www.arita.jp/
E-mail arita-info@castle.ocn.ne.jp

企画制作・編集　アリタ ノ ヒビキ 実行委員会

表紙写真／泉山磁石場の採掘口から望む英山（はなぶさやま）

苔生した唐船城の石垣

創刊によせて

一般社団法人有田観光協会を立ち上げて6ヶ月が過ぎました。当協会では、さまざまな媒体を使ったPR活動を行っていますが、パンフレット等では紹介できないような佐賀県有田町の魅力を知っていただくために、フリーペーパーを発刊いたします。人物にスポットを当てて有田をご紹介することによって、さらに深く、有田の面白さをお伝えしたいと思います。

タイトルである「アリタノヒビキ」には、有田町民同士が響き合うように、有田の人とお客様が響き合うように、また、食と器が響き合うように、という思いが込められています。

このフリーペーパーを手にされたみなさまも、有田の響きを感じ、一緒に響き合っていただければ幸いです。

平成24年3月

一般社団法人 有田観光協会　会長　田中義久

2つの有田のルーツ

有田は、ここから始まった。

唐船城、八百年。

有田の始まりは『唐船城』から

今年のNHK大河ドラマ『平清盛』の舞台となっているのは、今から900年前の平安末期。平治の乱後、所領・財力・権力・地位のすべてを平家一門が握る状態が続いたが、1185年〈壇ノ浦の合戦〉で滅亡した。この源氏戦勝の要因に、水軍・『松浦党』の存在があったことをご存知だろうか。

『松浦党』とは肥前松浦地方で活躍した嵯峨天皇の流れを汲む源氏の豪族集団で、海にあっては〈倭寇〉、いわゆる海賊として恐れられた。壇ノ浦では平氏より頼みの水軍とされて行動を共にしたが、潮の流れが源氏側有利に反転した時点で源氏に味方し、一気に勝敗が決した。歴史に名を残すこの合戦に、わがふるさとの男たち『松浦党』の存在があったことは驚きだった。

党祖は源久（松浦久）。一族はそれぞれの拠点地の地名を苗字にした。中でも有田地方の開発に乗り出したのが、源久の孫の源栄。父・直からこの地を譲り受けた後は有田三郎栄と名乗り、1218年には有田川畔に『唐船城』を築き始めた。有田のルーツは、ここにあり。

大きく湾曲した有田川を天然の外堀としたこの城は、舟形の岩山に築城された堅固な山城である。一見、こんもりとした森に見えるのが唐船城趾で、北側にある山田神社、中腹にある八坂神社が本丸跡のようだ。木々がざわめく中、西側の一番高い所まで上ると、そこは狼煙台だったのだろう。さえぎるものが一切ない眺望である。

空の青さに泰平の世を見ようとも、

有田丹後守累代芳霊塔

争乱の世を生きなければならなかった男たちに、夢を語れる明日はなかったのかもしれない。

最後のプリンス・有田五郎盛の苦悶の人生

代々続いた有田氏も南北朝末期には嫡男が途絶えたため、『唐船城』は城主不在のまま、宗家相神浦松浦氏が兼任することになった。しかし、佐世保を含む松浦党の一門内には、全体を取りしきる強力な宗家がいなかったせいか、親戚や兄弟間でも所領をめぐる争いが絶えなかった。また、周辺の有力大名たちも互いに勢力争いをしていた。

中世の戦国史を読むと、まさに「昨日の敵は今日の味方」。他者はもとより身内でさえ腹の内は見せず、さまざまなもくろみの中で巧妙な駆け引きがなされている。中でも養子縁組戦略はその最たるもので、宿命を背負わされた武将の子どもらは、あたかも将棋の駒のように父や側近らの思惑に翻弄される人生を送っている。

築城から400年続いた唐船城最後の城主・五郎盛は、まさに悲劇のプリンスである。宗家松浦氏の領土保全と勢力維持を企図した飯盛城城主・松浦親のもとに養子入りするが、のちに親は平戸松浦氏との決戦に破れ、平戸隆信の軍門に下ることになる。和睦の条件は平戸隆信の三男を養子に迎えること。親は盛の処遇に窮し、平戸氏側とは事を穏便にすませたいがために盛を唐船城に拠らしめ、自らは宗金と改称して隠棲してしまうのだ。養父に裏切られ、地位を奪われた盛の屈辱は、いかばかりだったろうか。のちに家臣らと飯盛城奪還の戦を企てることになる。

1572年正月、盛は実家・有馬氏の援軍を得て、相神浦を攻めるが大敗。この『相当原の戦』は本来一家の内紛であったため、親兄弟が敵味方に分かれて戦うという悲惨なものだったようだ。以後、盛はまったく振るわなくなり、1576年、西松浦に侵攻してきた龍造寺隆信に降伏。盛は龍造寺氏に屈して家臣となり、近世に生き残ることができたという。

果たして、唐船城城主・五郎盛とはいかなる人物だったのだろうか。おそらく誰よりも人の愛を乞うた人物であったのではなかろうか。戦国の世に灯る蛍火のような盛の人生に、愛しいような男の寂しさを見た気がした。

良妻・お才、夫への愛の証

史実としては何ら書き残されていないが、今も地元で語り継がれている夫婦愛の悲話伝説がある。

五郎盛が起こした『相当原の戦』は、いわば本宗家再興のための戦いである。家臣として誠の忠義を全うする武士の山本右京は、一刻も早く飯盛城主に知らせねばと、身重のお才と一子・勝之介を連れて唐船城を脱出。年末の吹雪の夜を山越えするのだ。

しかし、山を越えた頃、お才が急に産気づいたため、炭焼き小屋の女房に産後の看護を頼んで、わが身は飯盛城へ。右京の知らせのおかげで、主君・親は戦闘配備を万全にととのえることができ、相神浦・平戸軍は有田軍を相当原で迎え討ち勝利を収めた。

ここで、伝説として語られている

お才観音堂

古い石畳が残るおさい峠

有田川から山田神社を抱く唐船城

山田神社の本殿

笹NO音
SASA NO NE 000

歌人・笹井宏之のあしおと

皿山に
皿の音ひびき
一本の
苗より生れし
大樹のそよぎ

短歌：笹井宏之

1982年8月1日、佐賀県西松浦郡有田町泉山に生まれる。
2004年、短歌を作りはじめる。
2005年10月、連作「数えてゆけば会えます」で第四回歌葉新人賞を受賞。
2007年1月、未来短歌会に入会。加藤治郎に師事。同年度、未来賞受賞。
2008年1月25日、第一歌集『ひとさらい』（Book Park）刊行。
2009年1月24日、自宅にて永眠。（享年26）
2011年1月24日、『えーえんとくちから　笹井宏之作品集 』（PARCO出版）、
第一歌集『ひとさらい』、第二歌集『てんとろり』（ともに書肆侃侃房）、刊行。

ブログ「些細」　http://sasai.blog27.fc2.com/

イラストレーション：MATSUICHI

佐賀県伊万里市に生まれる。有田工業高校デザイン科卒。
九州の北部僻地を中心にグラフィックデザインと
webデザインを生業にしながら、
ポップでナイーヴで流行に左右されない、
矛盾を内包したイラストレーションを描き散らかしています。

http://www.ngraphic.net/MATSUICHI/
matsuichi99@gmail.com

ことがある。主君にいち早く謀反の報告をしたのは、女房のお才であるというのだ。夫・右京が飯盛城に登城する寸前、お才はこの世を去っていたという。お才の魂は夫より早く城に入り、五郎盛の反逆を注進。夫を想うその真心と愛情の深さに、今も昔も人々は同情の涙を流す。

旧西有田地区から国見山頂を越え、佐世保市柚木町の『おさい峠』を行くと、木立の中に『お才観音堂』が祀られている。現在も安産の神様として人々の信仰を集め、子授けや安産祈願、お礼参りに足を運ぶ親子の姿が見られる。

境内の寄り添う3本の木々は、まるで山本右京一家が肩を寄せ合うかのようで敬虔な気持ちにさせられた。

文＝荒岡弥生　写真＝片岡聡

寄り添う親子に見立てられる境内の樹木

観音堂内でのお礼参り

お礼参りに訪れた親子

2つの有田のルーツ

有田は、ここから始まった。

有田焼、四百年。

※泉山磁石場内の写真は特別な許可を得て撮影しています

有田から日本磁器の夜明け

『有田焼』はまもなく創業400年を迎える。これは、いわゆる日本磁器の歴史でもある。

17世紀初頭、朝鮮人陶工・李参平こと金ヶ江三兵衛らによって磁器の原料となる陶石が発見され、土ものの陶器が主流だった日本の陶磁器生産に大変革をもたらした。

豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、鍋島勢によって連れて来られた李参平らは、当初は多久で製陶に従事。しかし、白磁を作りたいという強い思いから、磁器の原料を求めて探索の旅に出る。そうして1616年、ついにここ有田町で『泉山磁石場』を発見したと言われている。

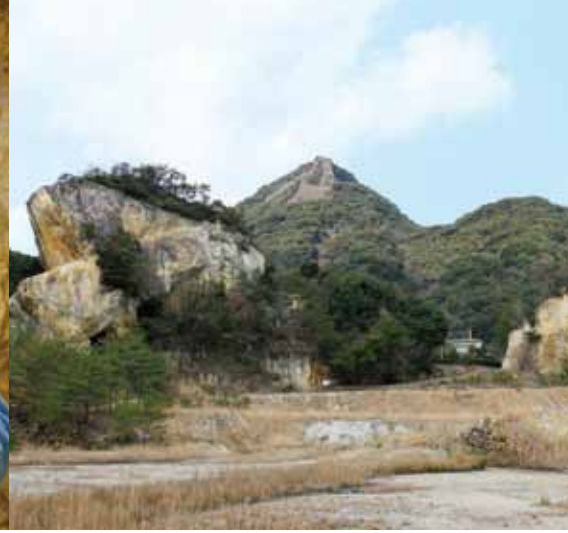
良質の泉山陶石は瞬く間に大金を生むドル箱商品となり、佐賀藩・皿山代官所の厳しい管理下で磁器中心の生産体制が確立された。製品は〈初期伊万里〉と呼ばれる素朴なものから、中国風の華やかなデザインへと大きく変化していき、ヨーロッパの王侯貴族たちの間で大いにもてはやされた。

〈400年かけて、ひとつの山をやきものに変えた〉といわれる『泉山磁石場』。陶工としての凄腕と、仲間を統率するカリスマ性を併せ持った李参平という朝鮮人が、この地を踏むことがなければ、日本の磁器文化の開花はもっと遅れていたことだろう。彼の想いと技術は、時を経た今も子孫の十四代・金ヶ江三兵衛さんや、多くの陶工たちによって受け継がれ、窯業のまち・有田にしっかりと息づいている。

泉山陶石

陶祖李参平象（石場神社内）

藤巻製陶9代目で、有田磁石場組合議会議長の藤本覚司さん



パワースポット『泉山』の魅力を語る

早春とはいえまだ寒風の吹く中、初めて『泉山』を訪ねた。今でこそ歩道も整備され、まちの観光スポットになっているが、李参平が訪れた当時は、おそらくあたりは鬱蒼としたただの岩山だったと思われる。

しかし、ここに立つと心なしか空気の澄み方が違う。通り抜ける風は足もとから浄化されていくような神秘さを感じさせてくれる。

近頃スピリチュアルという言葉が流行っているが、目には見えなくとも、その地に秘められたパワーは存在する。その力強さの由縁は、きっとこの大空の下で懸命に生きた先人たちの命火なのではないだろうか。

「ここに来ると、有田焼に携わった全先人たちの熱いエネルギーを感じるんです。日本中に採石場はあっても、ただの石を宝物に変えたのは有田だけだと自負しています」。

『藤巻製陶』9代目で、有田磁石場組合議会議長の藤本覚司さん(67)は、泉山への特別な思いを語ってくださった。

「当時は手掘りだったでしょうから、採石後に石を運び出し、砕石して土にするという、実に手間のかかる作業をやっていたわけですよね。それに陶石は天然資源なので質も均一ではないですし、試験データもない時代に等級の区別はどのようにしていたのかと感心します。ですから、こうして石場の中に入って掘削の跡を見ると、ここの原料でどんなものを作ったんだろうかとつい想像してしまうんです」。

泉山陶石の変遷をたどると、17世紀の半ばから、数百万個の有田焼が

採掘口跡

ヨーロッパに輸出されて大ブレイク。同じ頃、佐賀藩は大川内山に御用窯を開き、最上級の泉山陶石と技術の優れた御用職人を使って、有力大名への献上品の製造を行なっていた。

しだいに有田の磁器が庶民階級まで普及するにつれて量産体制に入り、明治後期には鉄分の少ない熊本・天草陶石を原料とした製品が主流に。泉山陶石は粘り気がなく、成形や焼成に難点があるため、昭和初期には泉山陶石の使用比率は30％を割り込むまでになってしまった。

しかし、泉山の原料で作られた白磁面には独特の青みがあり、天草のそれとはひと味違った気品と格調の高さが高く評価されている。現在ではタイルや耐酸磁器などの一部の原料として使われているのみで、それだけにもう一度『有田焼』の原点に戻って、泉山陶石の可能性を再構築したいと、藤本さんらは窯主たちに呼びかけている。

「泉山は、今と昔の陶工者たちとの魂の格闘の場だと思っています。いつの時代もやきものだけで食べていくには困難な状況があり、でもそんな中でも先人たちは知恵を絞り、団結して、この泉山を後世に残してくれました。これからの未来、ここが再び宝の山となるよう可能性の道筋を探して、若手に引き継いでいくことが我々の使命だと思っています」

有田焼創業400年を前に、一部の窯主たちの間では早くも新たなる一歩が模索し始められている。低迷しているやきもの業界に新風を起こすやきものが、今ゆっくりとこのまちで生まれようとしている。

泉山復興で甦る古伊万里の輝き

「昨年の6月頃からだったでしょうか。泉山の石を使って古伊万里をやりたいねって、ふたりで話したのは。有田でやきものを作る者としては、実に挑戦しがいのある奥深い取り組みでした」。

泉山陶石を使って、江戸時代の古伊万里・柿右衛門の復刻を行っているのは、有田の名工・奥川俊右衛門さん（63）と樋口憲人さん（65）。お二人はまず磁石場に足を運び、石の層をじっくりと眺めて、採掘場に狙いをつけた。そして、古い文献を手がかりにして、当時の土作りを学ばれたようだ。

土作りはまず砕いた石を水に溶かし、かくはん後にその上澄みだけを掬い取る。次に適度に粗くて、できるだけ白い土を加え、土に可塑性（粘り気）を出すのがポイント。そのよしあしを知るのは、土をいじるろくろ師の勘、つまり熟練の手指が教えてくれた。

「土が完成したのを機に九州陶磁文化館に出向き、何を作るかを館長とも相談しながら、古伊万里・柿右衛門の八寸の十角皿にチャレンジしてみようということになりました。当時の作品を観察すると、細部に至るまでものすごく丁寧な作りで、ろくろの技術がいかに重要だったかを再認識しました。道具のない時代にどうやってここまで繊細巧妙な作品が作れたのか、すべてが先人のやり方を想像しながらの試行錯誤でした」。

完成品を見せていただくと、それは江戸時代の空気をはらんだ骨董の雰囲気漂う器で、これこそ有田焼の原点に触れた思いがした。

「本物の材料を使うことで、非常に味のある作品が生まれました。今後は泉山の原料を使うことで差別化を図り、元来の有田焼を守っていけたらと思います。あとは泉山陶石を原料にした土をどうやって量産していくかが課題です」。

名工の挑戦に終わりはない。

文＝荒岡弥生　写真＝片岡聡、佐々木典子

俊右衛門窯の奥川俊右衛門さん

乃利陶窯の樋口憲人さん

泉山陶石を使った試作品